ブルーノ・タウトとジードルング

―ヴァイマール共和政下における住宅改革の思想と実践

お茶の水女子大学名誉教授・工博　田中 辰明

20世紀初頭のドイツにおいて、「住まう」という行為は単なる私的生活の問題ではなく、国家と社会の再建にかかわる重大な課題であった。第一次世界大戦によって疲弊したドイツでは、深刻な住宅不足が社会問題となり、多くの労働者が過密で不衛生な住環境に置かれていた。そうした時代に現れた建築家が、ブルーノ・タウトである。彼は建築を単なる造形芸術ではなく、人間の生活を改革するための社会的装置として捉えた。そして、その思想が最も具体的に実現された舞台こそ、「ジードルング(Siedlung)」と呼ばれる住宅団地であった。

ジードルングとは、本来は「入植地」や「定住地」を意味するドイツ語であるが、20世紀初頭のドイツ建築史においては、主として公共住宅団地を指す言葉として用いられる。とりわけヴァイマール共和政期のベルリンでは、自治体主導による大規模住宅供給政策が進められ、多数の近代的ジードルングが建設された。そこでは、採光、通風、衛生、緑地、共同体形成などが重視され、旧来の暗く劣悪な裏庭型集合住宅とは全く異なる生活環境が目指されたのである。

タウトは、その住宅改革運動の中心人物であった。彼は単なる設計者ではなく、社会思想家であり、色彩論者であり、都市改革者でもあった。彼にとって建築とは、人間精神を解放するための手段であり、明るい住宅は民主主義社会の象徴でもあったのである。

表現主義から社会住宅へ

タウトは1914年、ケルンのドイツヴェルクブンド展覧会において《ガラス・パヴィリオン》を設計し、一躍前衛建築家として知られるようになった。ガラスの光に満ちた幻想的空間は、表現主義建築の代表作とされる。しかし、第一次世界大戦後、彼の関心は次第に幻想的造形から現実社会の住宅問題へ向かうようになる。

敗戦後のドイツでは、革命とインフレーションの混乱のなかで、新しい社会秩序の模索が続いていた。タウトはこうした状況のなかで、「民衆のための建築」を強く指向するようになる。そしてベルリン市の公益住宅貯蓄建設㈱(GEHAG)主任建築家として就任した彼は、大規模住宅供給計画に深く関与していった。

彼の住宅思想の根底には、「光・空気・太陽」の理念があった。これは単なる衛生思想ではない。狭く暗い住居から人々を解放し、人間の精神を健全に育てるという倫理的理念であった。彼は住宅を「魂の器」と考えたのである。

ベルリンのモダニズム住宅群

タウトが設計した数多くのジードルングのなかでも、特に重要なのがベルリンに建設された一連の住宅団地である。これらは2008年、「ベルリンのモダニズム住宅団地群」としてユネスコ世界文化遺産に登録された。

その代表作が、ブリッツ馬蹄形住宅である。これは1925年から30年にかけて建設された大規模住宅団地で、中央の池を囲む巨大な馬蹄形建築によって知られている。設計にはタウトのほか、都市計画家のマルティン・ヴァーグナーも参加した。

この住宅団地は、それまでの都市型集合住宅とは根本的に異なっていた。各住戸には日光と通風が十分に確保され、住民には庭も与えられた。建物は単調な灰色ではなく、鮮やかな赤、青、黄などの色彩で塗り分けられていた。タウトは色彩を単なる装飾とは考えず、人間心理を活性化する重要な要素とみなしていたのである(写真1、2)。

さらに重要なのは、この住宅が特権階級ではなく、一般労働者のために計画された点である。そこには、近代建築が社会改革と結びついていたヴァイマール期特有の理想主義が見て取れる。

また、オンケル・トムス・ヒュッテも重要な作品である。この団地では森林環境との調和が重視され、低層住宅が緑の中に配置された。都市生活と自然との融合を目指し



写真１　タウト設計の田園都市ファルケンベルク集合住宅玄関（1913-1916）（世界文化遺産）



写真２　タウト設計のトリアー通り（Trierer Straße）の集合住宅



写真４　タウト設計のカール・レギーンの集合住宅（1928-1930）（世界文化遺産）



写真３　タウト設計の森のジードルングオンケルトムズヒュッテの集合住宅（1926-1931）（世界文化遺産）

た計画であり、のちのガーデンシティ思想とも呼応している（写真３）。森のジードルングオンケルトムズヒュッテは本稿執筆中の2026年７月にユネスコの世界文化遺産に登録された。

さらに、カール・レギーン住宅団地では、合理的平面計画と豊かな中庭空間が組み合わされている。そこでは、単に「住む箱」を大量供給するのではなく、共同体としての生活環境が追求されたのである（写真４）。

色彩の建築家

ブルーノ・タウトを特徴づけるものとして、色彩への強い関心を忘れることはできない。近代建築というと、しばしば白い箱型建築のイメージが語られる。しかしタウトは、それとは異なる道を歩んだ。

彼は色彩を、都市生活の精神的荒廃に対抗するための手段と考えた。ベルリン冬季の灰色の街並みに対し、彼は鮮やかな色彩を導入したのである。赤い扉、青い壁、黄色い階段室――それらは単なる意匠ではなく、住民の日常感覚を豊かにするための社会的装置であった。

この点で、タウトは機能主義一辺倒の近代建築家とは



写真５　タウト設計のシェーンラカー通り（Schönlankerstraße）（1926-1927）（現在 Ernst Fürstenstraße と改名）の集合住宅

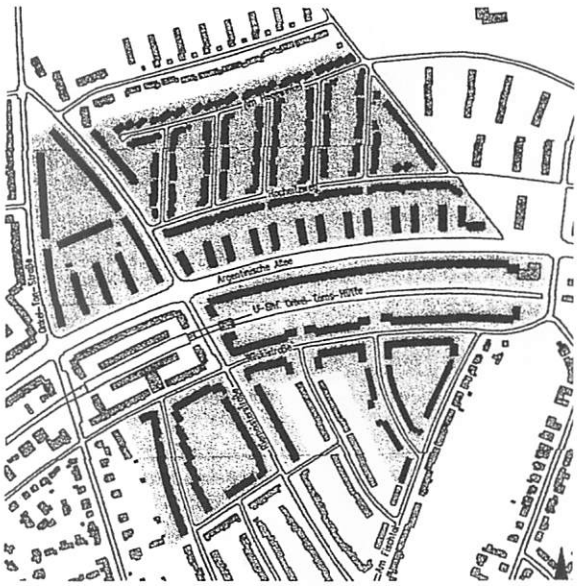


図１　森のジードルング・オンケルトムズヒュッテの敷地配置図

異なる。彼は合理性を重視しながらも、人間の感情や喜びを軽視しなかった。むしろ、「美しい住宅は人間を幸福にする」という信念を抱いていたのである（写真５）。

ジードルングと民主主義

タウトのジードルングは、単なる住宅供給事業ではない。それはヴァイマール共和政における民主主義の空間的表現でもあった。

帝政ドイツ時代の都市空間は、階級によって厳格に分断されていた。富裕層は広い住宅に住み、労働者は裏庭の暗い長屋に押し込められていた。しかしタウトのジードルングでは、労働者にも光と緑が与えられた。そこには、「すべての人間に健康で尊厳ある生活を」という理念が存在していたのである。

また、住戸配置や中庭計画には、住民同士の交流を促す意図もあった。個人を孤立させるのではなく、共同体としての生活を形成することが目指された。つまり、ジードルングは単なる建築計画ではなく、社会民主主義的理想の空間化でもあったのである（写真６）。

ナチズムと亡命

しかし、こうした理想主義は長く続かなかった。1933年、アドルフ・ヒトラー率いるナチ政権が成立すると、ヴァイマール期の進歩的建築家たちは排除されていく。タウトもまた、その対象となった（写真７）。

彼はドイツを離れ、まずソ連、ついで日本、さらにトルコへ亡命した。日本滞在中には桂離宮や伊勢神宮に深



写真６　オンケルトムズヒュッテジードルング内にあるタウトの顕彰碑（住民がタウトに謝意を示し、建設された）

い関心を示し、日本建築論『ニッポン』を執筆している。簡素さと機能性を重視する日本建築に、彼は近代建築の本質を見いだしたのである（写真８、９）。

その後、トルコで建築教育に従事したが、1938年に死去した。わずか58歳であった（写真10）。

世界文化遺産としての評価

現在、タウトのジードルング群は単なる歴史的建築としてではなく、近代社会改革運動の重要な遺産として評価されている。

ユネスコがベルリンのモダニズム住宅団地群を世界文



写真7　ベルリン郊外、ダーレビッツ(Dahlewitz)のタウト旧宅(タウト設計、1933年タウトが日本に脱出するまで、家族と共に住んでいた)



写真8　タウトが伴侶エリカと共に住んだ高崎の少林山達磨寺「洗心亭」(住職広瀬大蟲一家の手厚い世話があった)

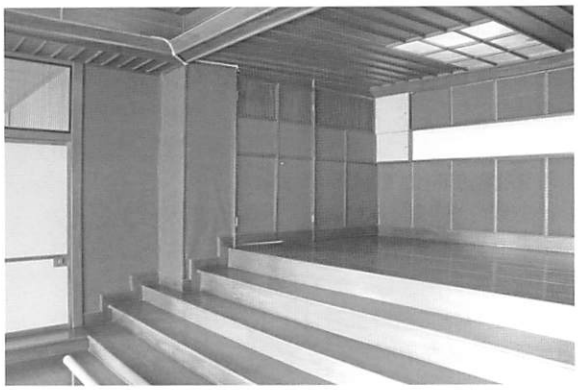


写真9　タウトが日本滞在中設計した唯一の作品、熱海の日向別邸洋間



写真10　トルコ。イスタンブールエディルネ国葬墓地でブルーノ・タウトは永遠の眠りについている。

化遺産に登録した理由は、それらが20世紀都市住宅の新しいモデルを提示したからである。採光、衛生、緑地、色彩、共同体形成といった理念は、その後の世界中の集合住宅計画に大きな影響を与えた。

また、タウトの建築は、近代建築が本来持っていた社会的理想主義を今なお伝えている。今日、多くの都市では住宅が投機対象となり、人間の生活より市場原理が優先される傾向が強まっている。しかしタウトのジードルングは、「住宅とは人間の尊厳のために存在する」という根本理念を静かに語り続けているのである。

ブルーノ・タウトとジードルングの関係とは、単に建築家と作品群との関係ではない。それは、一人の建築家が、近代社会において人間らしい生活空間を実現しようとした格闘の歴史であった。彼の色彩豊かな住宅団地は、今日なおベルリンの空の下で、人間と建築との幸福な関係の可能性を語り続けているのである

〈参考文献〉
1．田中辰明；ブルーノ・タウト日本美を発見した建築家、中央公論新社、電子書籍
2．田中辰明；ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会；東海大学出版会
3．ユストゥス・ペンダー著・田中辰明訳：「なぜAfDは支持されるのか」同時代社
4．マルク・シーリッツ著・田中辰明訳：「暴走してしまう民意－民主主義を担うには私たちは愚かすぎるのか」同時代社